芭蕉の人間的魅力に迫る

俳諧師としての地位を確立していた芭蕉が突然旅に出ました。人も羨む宗匠暮らしを投げ捨ててまで、芭蕉が旅に求めたものは何だったのでしょうか。芭蕉の生き方を、その人間性に迫りながら、きらめき講座「芭蕉の世界Ⅰ」の講師、大原正義先生にお話しいただきました。

大原　正義（おおはら　まさよし）

関西学院大学文学部卒業
元大阪薫英女子短期大学助教授
国文学、日唐文化交流史を研究
現在、季刊文芸誌『日曜作家』編集代表、発行人
主な著書に、『長安の月　阿倍仲麻呂伝』
『策謀「大唐西域記」異聞』など

■旧態を廃し「わび・さび」の世界へ

芭蕉は、1644年、伊賀上野に生まれました。1672年、29歳の時、伊賀上野を出て、江戸で暮らしはじめました。

芭蕉の時代には俳句という言葉はなく、俳諧です。俳諧という言葉には、戯れ・おどけといったような意味があり、何人かの座のもとに、発句、脇句、第3句…と作り合っていく連句が主流でした。当時は、松永貞徳の古風な貞門俳諧が廃れ、西山宗因の滑稽味や機知に富んだ談林俳諧が台頭してきていました。いわゆる俳諧の変革期でもあったのです。芭蕉も当初は貞門派や談林派の句をつくり、35歳の頃には宗匠として社会的地位を確立しています。しかし、芭蕉はそうした俳諧にはあきたりず、発句の独立性を追求し、文学的に高めようとしました。

具体的に作品を見てみましょう。

「女をと鹿や毛に毛がそろふて
毛むつかし」

これは芭蕉が伊賀上野を出立する前に詠んだ句です。これに対し

「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」

という句があります。これは、深川の草庵に移ったばかりの時に詠んだものです。二句を比較するとおのずとその違いは分かります。前の句は内容もさることながら「毛」を三つ重ねて軽妙さを出しています。滑稽、言葉遊びで、文芸性からは程遠いと言わざるをえません。芭蕉が蕉風を確立する以前は、俳諧師の多くは奇抜な、機知に富んだこのような句ばかりを詠んでいたようです。それに比べて後の句はどうでしょうか。まだ談林風ではありますが、老荘や禅味を帯びた漢詩文調の色彩が色濃いと思います。水墨画の世界というか、枯れ、烏、秋の暮など「わび、さび」につながる世界観が見えるようです。蕉風第一歩を踏み出した句であると言っても過言ではありません。芭蕉38歳の句です。

■平穏を捨て去り「旅」に焦がれる

当時の芭蕉は弟子も多くお金も結構入ってきて名前も売れていました。普通ならそのまま安定した生活に満足して宗匠暮らしを続けそうなものですが、どうして大変な覚悟をしてまで、今の生活を捨てて旅に出ようと決意したのでしょう。その真意はどこにあるのでしょうか。

その頃、深川の草庵が火事で燃えてしまったことも影響しているのかもしれません。お金を持っていても無くなってしまう、いつ死ぬか分からないという無常観、いわば「方丈記」の世界にとらえられたのかもしれません。深川草庵の近く、臨川庵というところに仏頂という禅僧が住んでいました。芭蕉は仏頂に禅を学び、深く傾倒して、一時は僧になろうとまで考えていたことがあったようです。

またこの頃、芭蕉は荘子や唐代の詩人李白、杜甫、あるいは北宋時代の蘇東坡、黄庭堅、さらには西行や宗祇の書物に親しみ、その影響を深く受けていたものと思われます。

■人間くさく、俳聖にあらず

芭蕉は人間関係のしがらみもあり、けっこう悩んでいます。そういう人間くささがかえって魅力となっています。

晩年、大坂の門人、之道と酒堂が仲たがいしました。酒堂は喧嘩早くて性格的に難癖があった人物でした。伊賀上野にいた芭蕉のもとに仲裁をお願いしたいと別々に手紙が来ました。放っておけばいいものを、仲裁のために弟子とともに無理をして大坂へ向かいます。そして発病。仲裁はうまくいかず、この心労が引き金となって花屋仁左衛門の離れ座敷で亡くなってしまうのです。

書簡類の中にはいろいろな不満や誰それを可愛がってやってくれというようなことが残っています。我々と一緒で怒ったり悩んだりしているのです。普通の人間と全然変わらない人間くささを感じます。ですから、俳聖というのは当てはまらないのではないかと思います。

正式な奥さんではありませんが寿貞尼という人と一緒に暮らしていたといわれています。子どももいたそうですが、寿貞尼は芭蕉が伊賀上野に帰っている間に亡くなったということです。

伊賀上野出身で小柄な上に足が速かったこともあり、芭蕉忍者説というのが小説などに登場しますが、忍者ではありません。忍者とした方が小説としては面白いのでしょうが。芭蕉について、前半生を裏付ける資料はあまりありません。はっきりしているのは江戸に出た30歳くらいからです。後半生については、紀行文や書簡なども残っていて、芭蕉がどのような人であり、どのような生き方をしていたかを知ることができます。

■憧れの思いを抱かせる芭蕉流生き方

最初の旅の様子は、「野ざらし紀行」に記されていますが、紀行文は文学ですから創作で実際の行動との違いもあるでしょう。ただ、芭蕉を代表する「奥の細道」の旅については、同行した河合曾良が日記に書き残しているので、その足跡は詳細に追うことができます。

芭蕉が旅に求めたもの、芭蕉の本当の心は推測するしかないのですが、人の生き方の、ある深いものに影響をうけ、旅に出ることで自分を見つめ、これまでの生き方を反省するということだったのでしょう。そして自分を浄化し、世俗的なことを捨て去り、俳諧においては文芸性を高めて自分自身の納得できる何かを会得しようとしたのでしょう。

■先生の最も好きな俳句は

好きな句はいっぱいありますが、

「旅人と我名よばれん初しぐれ」です。

悲壮感の漂う「野ざらしを心に風のしむ身哉」（貞享元年、野ざらし紀行旅立ち時、江戸で）と比べ、ずいぶん精神的な余裕があります。

■北摂で詠まれた句は

茨木で詠まれた句は見つかっていませんが、次の句は北摂地域で詠まれています。

「卯の花やくらき柳の及びごし」
（元禄7年、高槻市の玉川橋）

春にはサクラ満開となる玉川の里の疏水沿いに句碑があります。玉川は古くから詩歌に詠まれ、5月には碑のまわりは卯の花が満開です。句碑はツタがからんだような額縁で囲われ、独特な字体で書かれています。裏面には芭蕉生誕150年の天保14年に建立したと書いてあります。

「ひばりなく中の拍子や雑子の声」（元禄3年以前、高槻市西真上）

「有がたきすがた拝まん杜若」（貞享5年、三島郡島本町山崎一丁目）

島本町の関大明神社

この神社のある場所は平安時代に廃止された関所跡だそうです。句碑には松尾芭蕉が山崎宗鑑（室町時代の連歌師・俳諧師）の屋敷を訪れた時の句が刻まれています。

「枡買て分別かはる月見かな」（元禄7年、大阪市住之江区住吉大社）

箕面の滝などにも訪れており、その時の句が残っていてもよいと思いますが、芭蕉の句の中にはありません。ただ、「笈の小文」の中に、下記のような記述があります。

『津國摂田の川上に有　布引の瀧　箕面の瀧　勝尾寺へ越る道に有』

旅の途上、西国街道、茨木付近を行脚する芭蕉の姿を想像することができます。芭蕉の制約されない生き方は、わたしたち現代人に憧れの思いを抱かせます。